

September 13, 2026

あわれみの神

ヨナ 4:10-11

4:10 主は言われた。「あなたは、自分で労さず、育てもせず、一夜で生えて一夜で滅びたこの唐胡麻を惜しんでいる。

4:11 ましてわたしは、この大きな都ニネベを惜しまないでいられるだろうか。そこには、右も左も分からない十二万人以上の人間と、数多くの家畜がいるではないか。」

ヨエル書といえば「いなご」でしたが、ヨナ書といえば「トウゴマ」（唐胡麻）です。トウゴマは「ヒマ」（蓖麻）とも呼ばれます。私の子どもころ「ヒマシ油」（castor oil）は下剤として使われていました。保湿作用があるので、皮膚や頭皮、髪の毛に塗って使う人もいました。ヒマシ油はトウゴマの種から作るのですが、種そのものには毒素があるので、種のまま食べてはいけないとされています。トウゴマの大きさは種類によってまちまちですが、高さが6メートルもの大きな木になるものもあるそうです。ヨナがアッシリアの都、ニネベの東のほうにある小高い丘の上に仮小屋を建て、何日も都を見張っていた時、ヨナのいたところに日陰を作ったのはそんな種類のトウゴマだったようです。

一、ヨナの不従順

ヨナは主なる神から、「立ってあの大きな都ニネベに行き、これに向かって叫べ。彼らの悪がわたしの前に上って来たからだ」（1:2）との言葉を聞いた時、最初、それに逆らってニネベとは全く反対の方向に逃れようとしてしました。それはアッシリアの首都ニネベに行くのを恐れたからではありません。神がニネ

べの人々の益になることをしようとされていると感じたからです。アッシリアは今日のイラク北部に生まれた国ですが、勢力を伸ばしエジプトにまで届く大帝国を作ろうとし、イスラエルは常にアッシリアに圧迫されていました。ですから、神はニネベを厳しく取り扱って滅ぼしてしまわれればいい。そうすればイスラエルは救われると、ヨナは考えたのです。ヨナは預言者でしたが、北王国イスラエルのヤロブアム二世に顧問として召し抱えられていました。いわゆる「宮廷預言者」、政府の高官の一人でした。ヨナがニネベに行くのを拒んだのは北王国イスラエルの政治家としての信念からニネベのためになることをしたくなかったからでした。それでヨナは外国に亡命しようとしたのです。しかし、それは信仰者として、ましてや神から召された預言者として正しいことではありませんでした。

時代は下りますが、南王国ユダが滅亡したときにバビロンに連れていかれたダニエルもまた、預言者であり、バビロンとペルシャで政治家でした。ダニエルはダレイオス王に重く用いられたので他の政治家がダニエルをねたみ、こういう禁令を制定しました。「今から三十日間、いかなる神にでも人にでも、ダレイオス以外に祈願をする者は、だれでも獅子の穴に投げ込まれる。」それは、ダニエルを陥れようとした者たちが、ダニエルが日に三度、神に祈っているのを知っていたからです。ダニエルはその禁令が悪巧みによって作られたことを知ってはいましたが、いつものように神に祈ることを止めませんでした。そのため、ライオンの穴に投げ込まれましたが、神はダニエルを守り無事にそこから救い出されました。ダニエルは政治的に行動することなく、神への信仰を第一にして行動しました。そのことは、ダニエルを救うことになり、ペルシャで神の御名がほ

めたたえられるようにったのです（ダニエル書6章）。

ヨナも、「ニネベに行け」と命じられたとき、自分で結果を予測したりせず、神の言葉に従えばよかったのです。政治家としてではなく、信仰者として、また、預言者として、神の言葉に従順であればよかったのです。

私たちの場合、ダニエルのような目に遭うことはほとんどないでしょうし、ヨナのように神の命令と自分の地位・立場との間で板挟みになることもあまりないと思います。しかし、毎日の生活の中で、クリスチャンとして生きるのか、それとも、神を知らない人たちと同じように生きるのかとの選択を迫られるのです。神の愛によって人に接するのか、それとも自分の感情のままにふるまうのか、特に意識していなくても、瞬間的にそうした選択をしながら生活しているのです。

私たちはクリスチャンだからといって他の人とかけ離れた生活をしてはいません。多くの人と同じように行動し、同じような会話をしています。しかし、信仰を持つ者は、自分が言ったり、したりすることが神の栄光を傷つけないように、他の人のつまづきにならないように言葉や行動を選びます。いや、もっと積極的に神の栄光を表せるように、他の人を励まし生かすことができるようにと願って、自分の思いよりも神のみこころを選びます。この世の基準ではなく、御言葉の教えに従うのです。そして、そうした信仰の決断が積み重ねられていてこそ、人生で大切な選択や大きな決断が必要なとき、正しい選択や決断に導かれるのです。

二、ヨナの不機嫌

ヨナは神の言葉に従わなかったため乗った船が嵐に遭い、海

に投げ込まれました。しかし、神はヨナのために大きな魚を用意しヨナは溺れ死ぬことなく、再び陸地に戻りました。神の救いを体験したヨナは、今度こそはニネベに行かないわけにはいきませんでした。ヨナは、ニネベに行って、「あと四十日すると、ニネベは滅びる」と叫びました。ニネベは街のすべてを回するには3日もかかる大きな街でしたが、ヨナはたった1日しかそうしませんでした。ところがニネベの人々はそれを聞いて悔い改め、王もまた神にあわれみを乞うようニネベの街のすべての人に命じました。神は人々の悔い改めをごらんになってニネベに下そうとしておられたわざわいを思い直されました。

ところがそのことはヨナを不愉快にしました。ヨナはニネベに行って務めを果たしましたが、それは不承不承で、心ではまだ、「ニネベは滅ぼされてしまえばよい」と思っていたからです。そこでヨナは「四十日」経ったらにが起きるかを見届けようとニネベを見渡すことができる丘の上に仮小屋を建て、そこに居座りました。そのときヨナを暑さから守ったのが木のように大きく育つトウゴマだったのです。ヨナはそのトウゴマをとっても喜びました。ところが神がそのトウゴマを虫に食わせたため、トウゴマは一夜にして枯れてしまいました。ヨナは神に不平不満をぶちまけました。すると神は言われました。「あなたは、自分で労さず、育てもせず、一夜で生えて一夜で滅びたこの唐胡麻を惜しんでいる。ましてわたしは、この大きな都ニネベを惜しまないでいられるだろうか。そこには、右も左も分からない十二万人以上の人間と、数多くの家畜がいるではないか。」(4:10-11)

ヨナ書はこの神の言葉で終わっています。ヨナは、神が言われることにことごとく反論してきたのに、この言葉に対するヨ

ナの反論はありません。それは、ヨナがもはや神に反論することができなくなったからです。ヨナは彼自身が、神に不従順であったのに海の深みから救われるという体験をしました。心のこもらないしかたでニネベの人々に神の言葉を伝えたのに、神の言葉が働いてニネベに大きな悔い改めが生まれたのを見ました。そして、枯れたトウゴマを惜しむ自分の心のうちを見つめました。そして、やっと神のあわれみの心を理解したのです。ヨナは「不従順」を戒められて神に従いました。しかし、その心には「不機嫌」が残っていました。一応務めは果たしたものの、それは心からのものではありませんでした。神がニネベをあわれまれたそのお心をヨナは自分の心としていなかったのです。それで神はヨナにトウゴマを使ってヨナの「不機嫌」を取り除かれたたのです。

私は、ある牧師が「不機嫌も罪です」と言われたのを聞いてハッと思ったことがあります。私はその先生と2週間ほど一緒だったのですが、その先生がニコッとなさったを見たことはありませんでした。「機嫌が悪いのかしら」と思ったほどでした。その先生が「不機嫌も罪です」と言われたので驚いたのですが、後になって「不機嫌」とはたんにニコニコしないということではなく、主の心を心としていないということであることが分かりました。セールスをする人はニコニコした顔で近づいて来ます。人を喜ばせるようなことを言います。しかし、それはテクニックにすぎません。しかし、主は、人に接するように命じられるとき、それは決して外面だけのことだけであってはならないと教えておられます。主がすべての人を愛し、あわれみ、いつくしんでおられる、その心を私たちもいただいて、それによって語り、行動するようにと教えておられます。

ピリピ 2:5 の「キリスト・イエスのうちにあるこの思いを、あなたがたの間でも抱きなさい」との御言葉は古い日本語では「汝らキリスト・イエスの心を心とせよ」と訳されていました。キリスト・イエスの心を自分の心とする。イエスの思いと自分の思いが一つになる。これは、どの時代のクリスチャンも祈り求めてきたものでした。そして、そのことだけが、私たちを「不機嫌」から解放してくれます。いつもと違ったことがあってもあわてない。嫌なことがあっても感情だけでそれに反応しない。ものごとをすぐに判断しないで最終的な結果を見守る。そうしたことは、主の心を自分の心とすることによって、はじめてできることなのです。そのことが、あわてず、あきらめず、天を目指して進む、確かな信仰の歩みへと私たちを導いてくれるのです。

三、神のあわれみ

その後、ヨナはどうしたでしょうか。40日間、最後の日まで仮小屋に居座り続けたでしょうか。いいえ、さっさとそれをたたんでしまって、イスラエルに帰ったと思います。ヨナは神にさんざん不満を述べましたが、最後には主なる神に降参しました。神の大きなあわれみがヨナの不機嫌を癒やしたのです。

ヨナは、イスラエルに帰ってから、北王国イスラエルが領土を回復すると預言し、それはその通りになりました。列王記第二 14:25 にこうあります。「彼〔ヤロブアム〕は、レボ・ハマテからアラバの海までイスラエルの領土を回復した。それは、イスラエルの神、主が、そのしもべ、ガテ・ヘフェル出身の預言者、アミタイの子ヨナを通して語られたことばのとおりであった。」これはニネベの悔い改めの結果でした。歴史の記録

によるとアッシリア王アダド・ニラリのときアッシリアの改革が行われ、アダド・ニラリに続く三人の王の間、アッシリヤの征服政策が中断されたことが知られています。それは、ヤロブアム二世がイスラエルを治めていた時（786-746 B.C.）と一致します。神はニネベをあわれみ、その悔い改めを受け入れてニネベを裁かれませんでした。ヨナは、最初、それはイスラエルを脅かすものになると考えましたが、神のご計画はもっと大きく、神はニネベとイスラエルの両方を救われました。ニネベの悔い改めがイスラエルの領土の回復と繁栄をもたらしたので、神はあらゆることを働かせて益としてくださるお方です。

そして、それらすべては神の深いあわれみから出ており、そのあわれみは今も変わりません。神はそのあわれみによって「だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられ」ます（ペテロ第二 3:9）。この主のあわれみと私たちの心とが一つとなり、私たちも、多くの人の悔い改めに導かれるため神のあわれみを祈り求める者になりたいと心から願います。

（祈り）

父なる神さま、あなたは「あわれみの神」です。どうぞそのことを言葉だけでなく、体験として知る者としてください。そして、あなたのあわれみがすべての人に向けられていることを心から信じて行動する者としてください。イエス・キリストのお名前です。